



Title	日本中世の伝承と相模国毛利荘
Author(s)	上杉, 和彦
Citation	文化継承学論集, 3: (49)-(56)
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/7476">http://hdl.handle.net/10291/7476</a>
Rights	
Issue Date	2007-03-23
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

## 日本中世の伝承と相模国毛利荘

### The Traditions in the Japanese Medieval Times and Mouri-no-sho in the Sagami Province

上杉 和彦

UESUGI Kazuhiko

#### はじめに

本論集の主題である「文化継承学」の趣旨をあらためて確認してみると、日本列島の古代を中心とする東アジアにのこされた文化遺産である①文字資料と文学作品②図像と美術・建築資料③出土遺物と遺構④伝承、を多様な角度から全体史的視野で解明することである(1)。本稿は、この趣旨に沿った試みの一つとして、筆者が関心を持つフィールドの事例を元に行う考察である。

具体的な検討対象としてとりあげるのは、近世の地誌に書き記された中世の相模国毛利荘地域に関する伝承である。延宝二年(一六七四)に徳川光圀が行った鎌倉遊覧をきっかけに水戸藩士によって編纂が開始され、貞享元年(一六八四)に完成した鎌倉の地誌である『新編鎌倉志』巻五(2)には、鎌倉長谷寺に関する次のような伝承が記されている(括弧内は引用者の補足。以下の史料引用においても同様)。

#### 【史料1】

長谷観音堂……相い伝う。この観音、大和長谷より洪水に流さ

れ、馬入(相模川)へ流れ寄たるを上げて、飯山に有しを、忍性と大江広元と謀りて、この所(鎌倉)に移すと。按ずるに忍性の伝に建保五年に生、十六にて出家すとあり。広元は嘉禄元年に卒す。時に忍性漸く九歳なり……この事不審……和州長谷寺の観音とこの観音とは一木の楠木にて作れり

ここで注目したいのは傍線部であり、その意味内容は「鎌倉の長谷寺の本尊である十一面観音は、大和の長谷寺から洪水で相模川に流れて飯山に上ったもので、その後、忍性と広元が現在の地に移したという」となる。

この短い記述の中には著名な人物・寺院がいくつか見えており、全て周知のことといつてよいであろうが、念のために簡単な説明を加えておく。

忍性は、建保五年(一二二七)に生まれ嘉元元年(一一三〇)に寂した真言律宗の僧侶で、叡尊の弟子となり、南都仏教の復興に尽力し、行基に傾倒して社会事業活動に専心した人物である。鎌倉に下向した後は、関東での授戒活動に活躍し、鎌倉極楽寺の開山となったことでも知られている。大江広元は、久安四年(一一四八)から嘉禄元年(一二二五)にかけて存命し、鎌倉幕府初代政所別当となり、頼朝・頼家・実朝という源家三代の將軍の側近であった人物である。

大和国の長谷寺および鎌倉の長谷寺も著名な寺院であるが、鎌倉の長谷寺については、天和二年(一六八二)に弁秋が著した『相州

鎌倉海光山長谷寺事実に、行基が建てた後、正治二年（一一〇〇）に大江広元が再建したという記事が見られる。しかしながら、史実としては、文永元年（一一六四）七月に鎌倉将軍惟康親王が本堂を造営し、龜山天皇より「長谷寺」の額を授かったことが確認でき、再建は文永年間のことと考えられる。ただ、鎌倉の長谷寺をめぐる大江広元に関する伝承がここにも見られることには注目しておきたい。相模国の飯山とは、相模国毛利荘地域（現神奈川県厚木市域）内の地名であるが、くわしくは後述する。

大江広元と忍性がそれぞれに生きた時代のずれ・話の荒唐無稽さを見れば、『新編鎌倉志』の記述が虚構であることは明らかである。本稿は、このような地誌に見える明らかに事実とはいえない記述の中から、どのような「史実」が読み取れるかを考え、登場する人名・地名・事象の相互関連性と伝承の舞台が相模国飯山という場でなくてはならなかった理由について論ずるものである。

## 第一章 大江広元と毛利荘―なぜ「大江広元」か

まず、はじめに考えてみたいのは、大江広元と毛利荘との関係である。

毛利荘は、現在の神奈川県厚木市域に存在した荘園で、文献上の初見は、次に示す治承五年（一一八二）正月十八日条の記事である。

### 【史料2】

去年十二月廿八日、南都東大寺・興福寺已下堂塔坊舎、悉以爲

平家焼失（中略）今日風聞于関東、是相模国毛利庄住人僧印景之説也、印景為学道、此兩三年在南都、依彼滅亡帰国云々

治承四年（一一八〇）の平家による南都焼き討ちの報が、学問修行のため南都に滞在していた毛利荘住人の僧印景によって関東にもたらされた、というのがその内容である。

毛利荘の荘園領主であるが、①三保名倉村（現神奈川県藤野町）の石橋尾神社にある文龜三年（一一五〇）の棟札銘に、「相州毛利庄、大和国春日太<sup>マコト</sup>、明神御領也」すなわち、毛利荘は大和国春日社領の所領であるとの記載があること②荘内の温水郷にある春日神社に応永二十四年（一四一七）の年紀のある「春日灯笼」が伝わること、という二点から、大和国春日社であったと推測することができる③。また毛利荘の在地における領有関係については、承安二年（一一七一）に伊豆山権現の経塚に埋納された和鏡に見える「藤原景行芳助平氏 相州下毛利」という記述が参考となる。

藤原景行とは、毛利景行のことと判断して間違いないだろう。景行は、治承四年（一一八〇）の石橋山合戦において、おそらくは相模国の平氏家人の武士として動員され、大庭景親軍の武士として参戦したが、その後、鎌倉幕府から許され、御家人になったものと思われる。しかし、建保元年（一一二二）に起きた和田合戦の際に、義盛に味方したために滅ぼされ、毛利荘を含む彼とそその一族の所領は、幕府に没収されたと考えられる④。

以上の点から、【史料2】に見える毛利荘は、景行の所領であつ

たと判断したい。僧印景についても、「景」の字の共通性という点から、景行の一族であったという推測が許されるのではないだろうか。なお、史料に「下毛利」とある以上、「上毛利」という地名があったものと思われ、その関係についても問題とすべきであるが、後に検討することとしたい。

さて、いよいよ大江広元と毛利荘の関係について論じなければならないが、【史料3】は、広元の毛利荘領有を示す唯一の史料である『吾妻鏡』建久五年（一一九四）八月八日条の記事である。

#### 【史料3】

今晚寅刻、將軍家（＝源頼朝）參相模国日向山給。是行基菩薩建立薬師如来靈場也（中略）因幡前司（＝大江広元）、於下毛利庄献駄餉云々

これより、毛利景行の所領であった「下毛利庄」が広元の手に戻っていたことが分かるが、源頼朝に対して景行が帰順した際に、その所領の一部である「下毛利」が没収され、広元に与えられたのではないだろうか。明証はないが、広元が有した他の所領の由緒を見ることが、そのような推測が可能になるものと思われる(5)。

ところで、前述したように、景行とその一族は和田合戦まで勢力を維持していたことがわかるが、あるいは彼らの所領として維持されたのが「上毛利」と称された毛利荘の一部だったのではないだろうか。そして、和田合戦の後、「上毛利」まで含めた毛利荘全体が広元の所領となったという過程を想定することができるだろう。

さて、広元より毛利荘を継承し、本貫地としたのは四男季光であった。名字として「毛利」を名乗った季光は、三浦義村の娘（泰村の妹）を室とし、承久の乱では東海道軍の一員として活躍した武士である。季光の娘は北条時頼に嫁いでおり、鎌倉幕府第四代將軍九条頼経より厚い信頼を受けた。

ここで問題としたいのは、毛利荘における季光の本拠地はどこであったかという点である。結論から述べるならば、『厚木市史 通史編』などがすでに指摘しているように、飯山であったと思われる。

次に示すのは、天保十二年（一八四一）に江戸幕府の地誌調所によって編纂された相模国一国の地誌である『新編相模国風土記稿』(6)に見える記事である。

#### 【史料4】

飯山村：江戸より十五里、此地に飯山と唱ふる山あるにより村名とすと云……嘉禄の頃は毛利蔵人大夫入道西阿が所領たりし事、浄土伝燈録に見えたり：毛利庄は大江広元入道覚阿の旧領にして、其子季光伝領せしなり

ここには毛利荘域のあくまで一部分である飯山村が季光の所領であると見えているが、これは毛利荘内の飯山に季光の本拠あるいは居館があったことを示すものと理解してよいであろう。『新編相模国風土記稿』「鎌倉郡鶴岡」の項に、広元と季光を祀った「飯山両社権現社」が鎌倉にあったと記されていることをもあわせ考えるならば、広元の居館も同所にあったことが推測可能であると考えられる(7)。

もしこの推測が正しければ、飯山周辺の地域が「上毛利」にあたり、「下毛利」とは相模川を下った毛利荘南域にあたることとなるか。そのような上・下の使い分けは相模川との関係からも矛盾はなく、現に十六世紀になると、毛利荘の北にあたる八菅山の地域を「上毛利庄」と称する史料も見える。また、【史料3】に見える広元の「下毛利庄」も、毛利荘の南部であったと見ることで、日向山に向かう源頼朝の立ち寄り先となった理由が地理的關係より説明しやすくなるであろう。

ちなみに現在、南毛利地区の三島神社が広元館の所在地として比定されているが、これは「下毛利荘」における広元の本拠地であったと理解することができるのではないか。

なお、宝治合戦において三浦氏へ加担したことにより、季光は三浦本宗家とともに滅亡し、その結果、大江一族の人物による毛利荘の領有は終焉することとなる(8)。

以上、『新編鎌倉志』に記された伝承の中に見えた毛利荘と大江広元の関係、および伝承の中に毛利荘内の飯山が登場する背景について確認した。飯山とはどのような性格を持った場所であるかについては、後の考察の中でふれることとしたい。

## 第二章 忍性・観音信仰と毛利荘

次に検討すべき点は、『新編鎌倉志』の伝承の中に忍性が登場することの背景である。この問題は、大江広元と毛利荘の関係ほど単

純ではなく、忍性に関わるいくつかの要素に関する考察を前提としてなくてはならない。

まず考えたいのは、忍性の活動の中心地域であった大和国と毛利荘との関係である。

前章の【史料2】で見たように、毛利荘の住人であった僧が南都で学問修行をしており、またやはり前章でふれたように、毛利荘は大和国春日社の荘園であったと考えられる。これらの点から、毛利荘と大和国に深い関係があったことが理解できるだろう。

次に考えたいのは、毛利荘飯山に流れていた観音が、なぜ大和国長谷寺から来たとされたか、という点である。この点に関しては、現存する清浄金剛寺と飯山長谷寺の総称であると考えられている「飯山寺」に関する『新編相模国風土記稿』所引の「飯山寺縁起」の記述を見たい。

### 【史料5】

観音堂 飯山寺と号し：長谷の観音と唱ふ：本尊十一面観音  
長三寸四分：神龜年間堂地より西方四町程字豊沢と云所の清  
泉中より出現すと云：神龜二年行基開：建久中源頼朝秋田城  
介義景をして造営を加へしめしと云

ここで注目されるのは、飯山寺の開基を行基とする記述である。また前述【史料4】の後段には、「坂東観音霊場記」に見える異説として、行基の作である仏像を大和国の長谷寺から飯山の地に持ってきた旅僧の話が見えている。これらより、【史料1】で見た『新編鎌

倉志』の記す伝承の中に忍性が登場した背景には、忍性が傾倒した行基の伝承があったことが推察されるのである。

さらに、飯山にまつわる観音像をめぐる伝承が残った背景を探るために、『新編鎌倉志』の伝承が、洪水や川を上るというモチーフを有したこの意味を考えてみたい。

毛利荘飯山が長谷観音信仰の拠点の一つであったこと(9)および相模川という交通の要となった大河川に毛利荘が近接したことが基本的理由であることは間違いないが、それらに加えて観音信仰と水運との関係を想起する必要もあろう。『古事談』や『扶桑略記』などに、大和国の長谷寺の本尊が、近江国より流れついた霹靂木によって作られたという伝承が見えるように、観音と水運には密接なつながりがあるものとされ(10)、毛利荘地域にもそのような意識を反映した伝承が残されたと考えられるのではないか。

ここで少し視野を広げて、毛利荘とりわけ飯山の地と鎌倉仏教との関係について考えてみたい。

まず指摘したいのは、専修念仏の隆覚と飯山の結びつきである。嘉祿二年(一一二六)に延暦寺僧定照の説を論破したことで、隆覚は翌安貞元年(一一二七)に朝廷より流罪の処分を受けた。だが、護送役の西阿こと毛利季光が、隆覚を毛利荘飯山にかくまい、これが荘域における浄土教の広がり契機となったことが『法然上人行状絵図』に見えている。なお、『新編相模国風土記稿』に隆覚が開いた寺と記される飯山の光福寺には、今も隆覚の墓碑が残されている。

また毛利荘域にある妙伝寺は、本間直重が龍ノ口の刑場より日蓮を連れてきた場所であるとする伝承を持つ寺である。さらに、北京律の中心である泉湧寺で修行した淨因が、飯山に放光寺(現在は廃寺)を開き、文永八年(一一七一)に同地で寂していることが知られる。ちなみに前述した飯山寺長老であった覚一房覚阿は、淨因・忍性に学んだ僧である。

このように毛利荘は、鎌倉仏教の担い手たちが活動した舞台であったことが知られるが、本稿の考察の出発点となった『新編鎌倉志』に見える伝承(史料1)との関係で特に注目したいのが、律宗と毛利荘との関係である。いうまでもなくその理由は、伝承に忍性が登場しているからであるが、さらに観音像伝承とも深い関わりを持つと考えられることも重要である。

建長四年(一一五二)、金銅製の鎌倉大仏の鑄造がはじまり、当時の鑄物師の一大拠点であった河内国丹南地方から、丹治久友・物部一族・広階氏・大中臣氏など多くの職人が鑄造事業に参加した。彼ら河内鑄物師を東国に招いたのは、河内での布教活動の際に彼らと接触を持った叡尊とその弟子忍性であったと思われる(11)。

そして、毛利荘飯山の地にも鑄物師がいた。『新編相模国風土記稿』「飯山村」の項(前述した【史料5】の後段の部分)に、神奈川県小田原市にある宿の州崎明神社にある応安元年(一一三六)九月十一日の鐘銘に「當所治工」の名が見えていると記されていることなどは、その一つの傍証である(12)。なお、飯山が鑄物師の拠点となった理由は、飯山を

含む地域に粘土層が存在し、また同地が良質な木材や炭の産地であったこと、さらに荻野郷の「銅座金山」・七沢温泉の「多々良沢」のような地名からうかがえるように周辺に鉱山が存在したことなどがあげられる(13)。飯山の長谷寺の観音像は木造であったが、同寺の鏡・梵鐘などに鋳物師集団の活動の跡は如実にうかがえ、伝承世界の中で大和・河内といった西国の地と鎌倉を結ぶ結節点として飯山が現れていたことには、十分な歴史的背景があったのである。

大和国と毛利荘の結びつき・忍性が尊敬した行基を開基とする寺の存在・「水」と深い関わりを持つ観音信仰の広がり・関東における律宗の広がり等々の事柄が連関性を持った伝承が展開する場として、毛利荘飯山の地はあったのである(14)。

### 第三章 伝承成立の場としての毛利荘

前章までの考察の結果、『新編鎌倉志』の伝承は、それ自体を史実として見る事ができないにもかかわらず、毛利荘という地域の歴史を反映して成立していたことがうかがえた。

そこであらためて注目したいと考えるのが、毛利荘をめぐる武士たちの問題である。毛利景行・大江広元・毛利季光のことはすでに述べたが、毛利の地を根拠地としていたのは彼らだけではない。

毛利景行以前の人物としてまずあげられるのが毛利義隆である。義隆は源義家の六男にあたり、平治の乱で討死にした人物であるが、『平治物語』に「義朝の伯父陸奥六郎義高(マツ)は、相模の毛利を知行

せしかば、毛利冠者共申けり」と見えている。あるいは、毛利荘は本来義家の所領であり、義隆に譲られたものだったのではないだろうか。

義隆の子頼隆もまた「毛利冠者」と称された人物であり、父より毛利荘を伝領したものと思われる。頼隆は、源頼朝から厚遇を受け、建久元年(一一九〇)・建久六年(一一九五)の頼朝の上洛に供奉したことなどが知られるが、頼朝将軍期以降は史料から名が見えなくなる。頼隆の子孫は引きつぎ鎌倉幕府に仕えたが、信濃国若槻荘に住んだとされる(15)。ある時点で頼隆あるいはその子孫は毛利荘を離れ、同荘に関する権利を手放したものと思われ、以後、「毛利(森)」はその名乗りとして残ることとなった。ちなみに織田信長に仕えたことで知られる森氏は、その後裔と伝えられている。

なお、前述したように毛利景行は藤原姓であり、義隆・頼隆との系譜関係は想定されず、また両者の毛利荘に対する領有権の相互関係についても明らかにすることができない。

宝治合戦で毛利季光の所領としての毛利荘が没収されたことは前述したが、その後、毛利荘は安達氏の所領となったのではないかと推測される。その根拠は、前述の【史料5】に、安達義景が飯山寺を造営した人物として現れること(16)、さらに飯山の清浄金剛寺と毛利荘散田郷に安達盛長のものとされる墓が現存していることである。盛長の時代に毛利荘が安達氏の所領であったことを裏付ける史料は他になく、毛利荘が安達氏の所領となったのは、宝治合戦時の安達

氏当主であった義景（盛長の孫）の代であったと見るべきである。盛長の墓なるものは、時期を遡及して仮託されたものであろうか。

そして、霜月騒動における安達氏滅亡後、毛利荘は得宗領となり、さらに鎌倉幕府が倒され北条氏が滅亡した後は、鎌倉府の直轄地というべき所領に転化していったものと思われる。

以上のように、毛利荘に関わりを持った人々の多くは、鎌倉幕府権力の中枢を担う者たちだったのであり、毛利荘は、いわば鎌倉幕府の政治過程の集約された地であった。

『新編鎌倉志』に見える伝承の中で、忍性との共同作業者として大江広元が登場したのは、広元の毛利荘領有のみならず、忍性が鎌倉幕府の保護を受けたという事実をも背景とし、広元という人格を鎌倉幕府権力の象徴とする意識を前提に成立したものであったのではないだろうか。

### むすびにかえて

あらためて述べるまでもなく、毛利荘は、鎌倉時代の政治・宗教文化・流通経済にとつて重要な位置にあった地域であった。本稿では、そのような地域の歴史の特質が伝承に反映し、「世俗権力と大和国の名僧の共同事業」を内容とする江戸時代の地誌の記述が成立したことを推定してみた。

地誌の記述を読み解く際の方法の一つとして、上記のようなプロセスを意識することが必要であり、過去の事実を復元する上での地

誌を活用することと多種多様な史資料を総合的に活用することの重要性をあらためて強調して、本稿を閉じたい。

（明治大学文学部教授 日本史学専攻）

### 注

- (1) 『文化継承学論集』創刊号より。
- (2) 『大日本地誌大系』所収。
- (3) 以下、毛利荘の沿革については、『厚木市史 中世通史編』第一章「鎌倉時代」に多くをよっている。
- (4) 景行とその一族の動向については、主に『吾妻鏡』による。
- (5) 大江広元の所領の多くは、謀反等の理由により朝廷あるいは幕府に没収された武士の所領からなっていた。上杉和彦『大江広元』（吉川弘文館、二〇〇五年）一七三―一七六頁を参照。
- (6) 『大日本地誌大系』所収。
- (7) 飯山を毛利荘内における広元の居所とする見解は、齋藤慎一『中世武士の城』（吉川弘文館、二〇〇六年）二二八―一三〇頁にも示されている。
- (8) 季光の所領の中で、安芸国吉田荘・越後国佐橋荘南条の地頭職は、子息の経光に安堵され、経光の子の時親に吉田荘が譲与された後、経光は「毛利」の名乗りを許された。よく知られているように、時親が吉田荘へ下向し、戦国大名毛利氏の祖となった。



(9) 中世の観音信仰の広がりについては、瀬谷貴之「長谷観音信仰と中世律宗」『鎌倉』一〇〇、二〇〇五年)を参照。

(10) 江戸の浅草寺の観音が海中から引き上げられたという伝承も、同種のものといえる。

(11) 馬淵和雄『鎌倉大仏の中世史』(新人物往来社、一九九八年)

(12) 市村高男「中世相模における鋳物師の存在形態」『六浦文化研究』五、一九九四年)

(13) この点をふくめ、毛利荘域における鋳物師の活動については、『厚木市史 中世通史編』別編第一章「鋳物師」を参照。

(14) 大江広元邸の比定地とされる南毛利地区の三島神社についても、その地域的特質を検討する必要があるが、本稿の考察との関連では、周辺に「長谷観音坂」が存在することにさしあたり注目しておきたい。

(15) 『尊卑分脈』

(16) ただし、義景の活動時期は頼朝の没後にあたり、この伝承は明らかに史実に矛盾する。